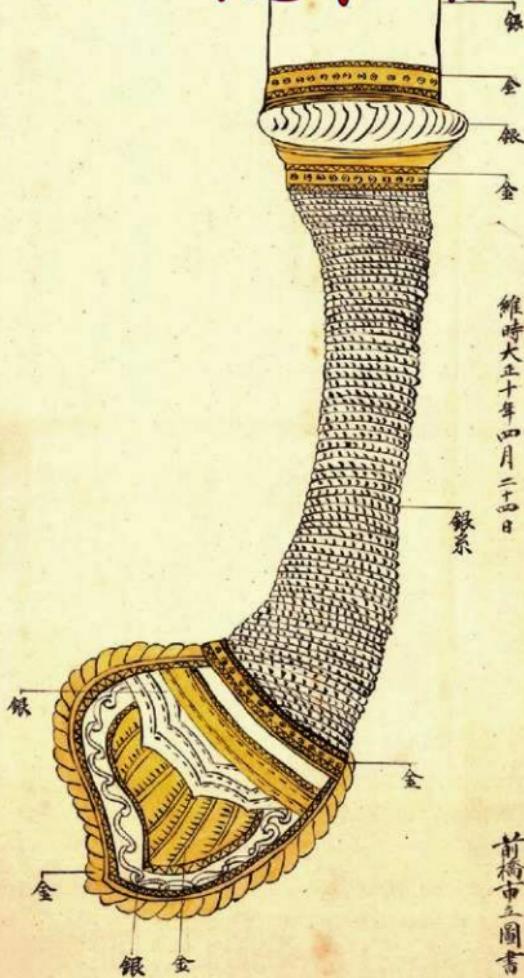


東国の雄 総社古墳群



総社二子山古墳出土

頭椎大刀柄頭

文政七年四月四日群馬郡植野村民木若三字二子山古墳ノ發掘シ花三才小刀鉗三口ノ發見シ文政七年甲申改新梨木村
山口又太郎京都出テ一口寶劍「銃大明神」ノ神號ヲ受ケ爾來至氏ノ尊崇之所トナル。此國ノ當時士校
現品ト等シ寫生チ有志間頃布シテ此國ハ總社町大字植野立見貢氏所藏係シ軸。今面本館ニテ
之ヲ借り更ニ館員係固春江氏シシミ筆寫セシムタリ。

維時大正十年四月二十四日

前橋市立圖書館

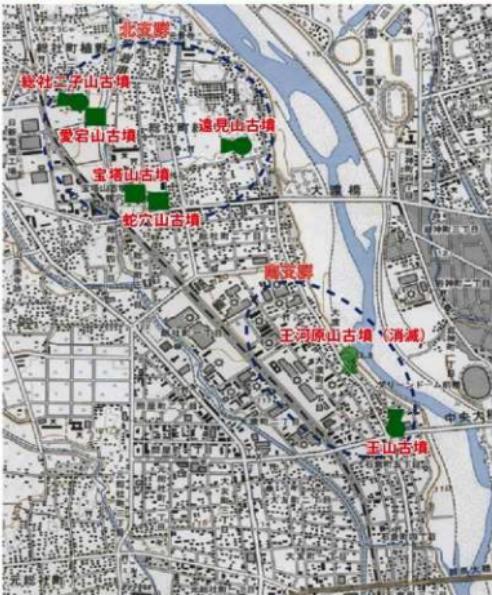


榛名山東南麓に広がる古墳群

総社古墳群は、東南方向に広がる榛名山の裾野の末端、現利根川の西岸に南北約4kmに分布する古墳群です。各古墳は、その規模や卓越した築造技術、優美な出土品などから、古くから注目されており、東国を代表する古墳群の一つに数えられます。大型の古墳としては、現在、前方後円墳3基、方墳3基が残されています。

古墳群の分布の様子を見ると、その立地から南北二群に分けられ、南支群には王山古墳・王河原山古墳（消滅）、北支群には遠見山古墳・総社二子山古墳・愛宕山古墳・宝塔山古墳・蛇穴山古墳があります。

総社古墳群は、まず5世紀後半に北支群に遠見山古墳が築かれ、その後6世紀初頭に横穴式石室を持った南支群の王山古墳や王河原山古墳が続くと見られます。以降は北支群で大型古墳が造られ、総社二子山古墳（6世紀後半）⇒愛宕山古墳（7世紀前半）⇒宝塔山古墳（7世紀中葉）⇒蛇穴山古墳（7世紀後半）へと移り変わります。



総社古墳群の分布

450年		
478	倭王武が南朝の宋に使いを送る	遠見山古墳
500年	榛名山が噴火する（6世紀初頭・6世紀中葉）	王山古墳
550年	百濟より仏教が伝わる	
593	聖德太子が推古天皇の摂政となる	総社二子山古墳
600年		
603	冠位十二階の制定	
604	十七条の憲法の制定	
607	前方後円墳が造られなくなり、埴輪が消滅する 聖德太子が法隆寺建立・小野妹子を隋に派遣	愛宕山古墳
645	中大兄皇子・中臣鎌足が蘇我氏を滅ぼす 「大化の改新が始まる」	
663	白村江の戦いで、日本が唐・新羅軍に大敗 山王佛寺の造営が始まる	宝塔山古墳
672	壬申の乱が起り、翌年天武天皇が即位	
681	山上碑が建立される	蛇穴山古墳
700年		

総社古墳群の移り変わりと主なできごと

遠見山古墳（前橋市指定史跡）



遠見山古墳全景(榛名山を望む)

【所在地】前橋市総社町総社給人城川 1410-1・2ほか

【形状】前方後円墳

【時期】5世紀後半

【墳丘全長】87.5m（推定）

（後内部径：52.5m 前方部幅：58.0m）



墳丘を飾る葺石



祭祀跡



立ち並べられた埴輪列

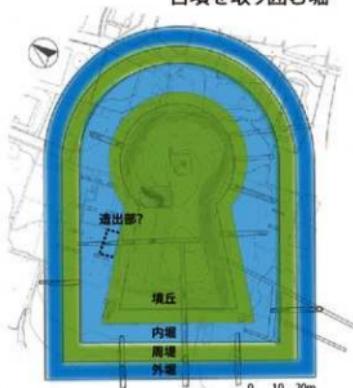


古墳を取り囲む堀

遠見山古墳は、総社古墳群北東部に位置する前方後円墳です。墳丘全長は87.5mで、周堀を含めた全長は130m以上に及びます。

墳丘は二段築成とみられ、段と段の間には円筒埴輪が立ち並べられていました。墳丘上では土器を使った祭祀跡が見つかっており、北側くびれ部には儀式の舞台となる「造出部」が設けられていた可能性があります。さらに、古墳周囲には2重の堀がめぐっていました。

埴輪や土器、周堀に堆積した火山灰などから、5世紀後半の築造と推定され、総社古墳群の成り立ちを知る上で重要な古墳です。



推定される古墳の範囲

王山古墳（前橋市指定史跡）



王山古墳全景（西より）

【所在地】前橋市大渡町一丁目 6-1

【規模】墳丘全長 75.6m (後円部径 : 50m・前方部幅 : 63.1m)

【形状】前方後円墳

石室全長 : 16.37m

【時期】6世紀初頭

(羨道 12m・玄室 4.37m)

王山古墳は墳丘全長 75.6m を測る大型の前方後円墳で、6世紀初頭に造られたと考えられます。昭和 47～48 年(1972～73)に墳丘全体が調査され、古墳の様子が明らかになりました。墳丘の築造方法としては、まず盛土で二段に墳丘の形を造った後、葺石を積み上げ、次に砂や礫が混じった川原石を詰め、さらに外面に大ぶりな自然石の葺石で飾ります。死者を埋葬する主体部は横穴式石室で、後円部の基壇上に造ります。石室の全長が 16m 以上と非常に細長く、玄室は赤く塗っていました。



墳丘測量図

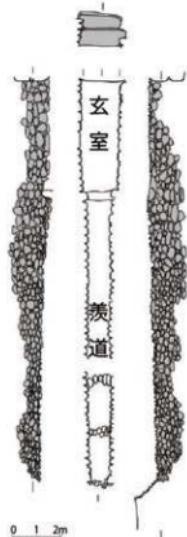


墳丘に葺かれた葺石の様子





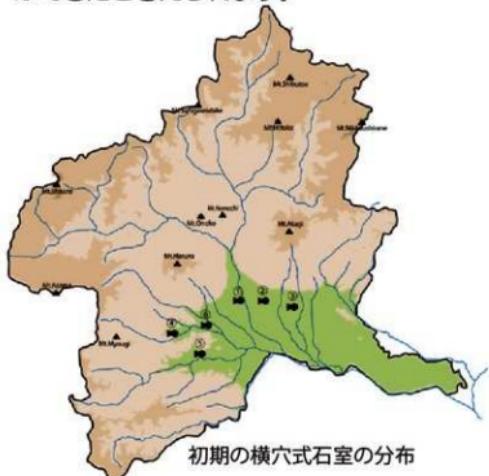
石室の様子（入口より）



石室実測図

出土品には円筒埴輪や、大刀・盾といった器財埴輪のほか、矢を持ち歩くための容器である胡籠の出土が注目されます。

本古墳は横穴式石室という新しい埋葬方法を採用しており、東日本でも最も古いものの一つです。初期の横穴式石室を持つ群馬県内の古墳としては、前二子古墳（前橋市）や築瀬二子塚古墳（安中市）などがあります。横穴式石室は畿内のヤマト王権で取り入れられた新しい葬制で、これをいち早く取り入れた群馬県中西部の豪族たちは、中央と強いつながりを持っており、先進的な技術や文物を取り入れることができたと考えられます。



前二子古墳石室



築瀬二子塚古墳石室

（提供：安中市教育委員会）

- ①玉山古墳 ②正円寺古墳 ③前二子古墳
- ④八幡二子塚古墳 ⑤一之宮4号墳
- ⑥八幡二子塚古墳

総社二子山古墳 (国指定史跡)



【所在地】前橋市総社町植野368

【形狀】前方後円墳

【時期】6世紀後半

【規模】

墳丘全長約90m(後円部径45m、前方部幅61m)

後円部石室 石室全長9.4m(残存高)、玄室長6.8m

前方部石室 石室全長8.7m、玄室長4.2m

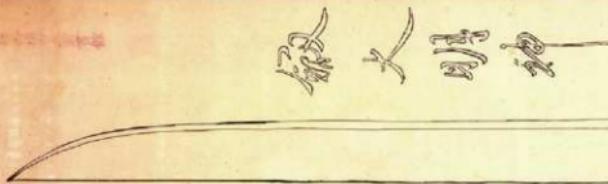
総社二子山古墳全景

総社二子山古墳は現状の墳丘全長で90mを超える大型の前方後円墳で、総社古墳群の中でも最大規模を誇ります。未調査のため墳丘の詳細な構造は不明ですが、二段築成で、墳丘斜面に葺石を葺き、墳丘全体に埴輪を立てていたとみられます。

墳丘の周囲には、浅く幅の広い堀がめぐっており、その外側にも堀を持っていた可能性があります。

石室は後円部・前方部の2力所に造られています。後円部石室は天井が崩落しているものの、県内でも最大級のものです。壁面は榛名山から噴出した角閃石安山岩を加工して巧みに積み上げています。前方部石室は、大ぶりな自然石を積み上げており、石室の規模も後円部石室より一回り小さな石室です。墳丘の形や石室の造り方などから、後円部石室→前方部石室の順で造られ、両石室とも6世紀後半に築かれたと考えられます。

総社二子山古墳出土刀剣実測図（前橋市立図書館所蔵）





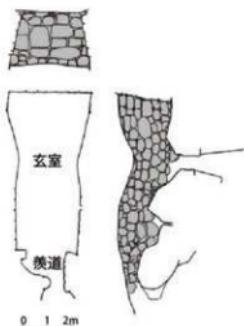
後内部石室の様子

(田澤金吾「上野国總社ニ子山古墳の調査」吉川弘文館より)

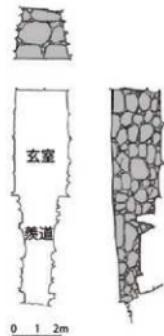


前方部石室の様子

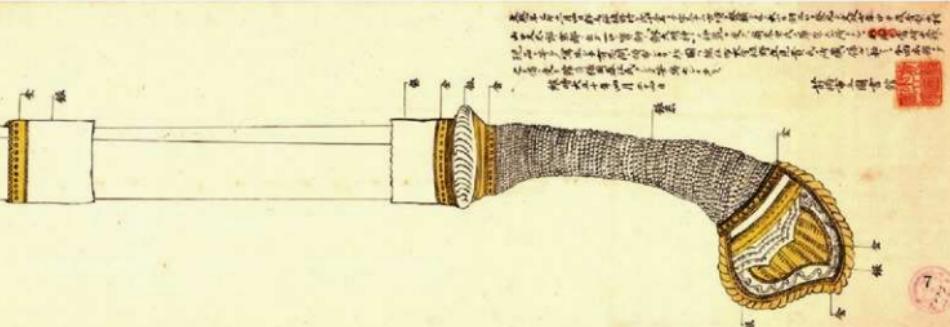
副葬品の様相は明らかではありませんが、前方部石室から勾玉や耳環、刀子、
大刀などが出土していることが知られています。特に頭椎大刀は、原品の所在が不明
ですが詳細な絵図が残されていて、様々な装飾が凝らされた非常に優美な大刀であつ
たことが分かります。また、その形状や作りなど、高崎市綿貫觀音山古墳出土の大
刀と非常によく似ています。



後内部石室実測図



前方部石室実測図



愛宕山古墳



【所在地】前橋市総社町総社 1763 ほか

【形状】方墳

【時期】7世紀前半

【規模】

墳丘全長 56m(推定)、墳丘高 8.5m

石室全長 9.28m(残存値)、玄室長 7.1m

あたごやまこふん

愛宕山古墳は墳丘長

56m

の方墳で、7世紀前半の築造と考えられます。

これまでの前方後円墳が姿を消して方墳という四角い形の古墳になります。

墳丘の調査の結果、三段築成以上の古墳であることことが分かりました。また、墳丘に埴輪は立てられなかったとみられます。墳丘斜面に大き目な

川原石を丁寧に葺き、さらにその外側にも葺石を施した特異な造りがみられます。墳丘のテラス面にも石が敷かれており、墳丘全体を石積みや石敷きで豪華に飾り立てていました。

南側に開口した石室は、巨大な石を積み上げて作られています。正確な規模は不明ですが、豪族の眠る玄室の長さだけで約7mもある非常に大きな横穴式石室で、天井や壁に用いられた榛名山から噴出した角閃石安岩の石材には部分的な加工が施されています。玄室の奥には、家の形を模した凝灰岩製の割抜式家形石棺が置かれるなど、墳丘ばかりではなく石室も贅をこらした豪華なつくりとなっています。割抜式家形石棺は畿内でも有力者の古墳に採用される例が多く、群馬県内では、このほか、宝塔山古墳、市内カロウト山古墳、太田市今泉八幡塚古墳、同市庚申塚古墳、同市横塚第28号墳などわずか6例を数えるのみです。

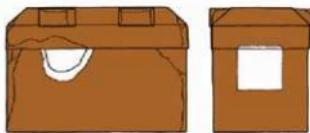


愛宕山古墳の石室と石棺の様子



0 1m

石室実測図



家形石棺実測図



0 1 2m



玄室

羨道



愛宕山古墳（墳丘北側の全体の様子）



愛宕山古墳（墳丘北側の葺石の様子）

ほうとうとくさんこふん

宝塔山古墳（国指定史跡）



【所在地】前橋市總社町總社 1606

【形状】方墳

【時期】7世紀中葉

【規模】

墳丘全長 66m、墳丘高 12m

石室全長 12.04m

（羨道長 3.56m、前室長 3.9m、玄室長 3.32m）

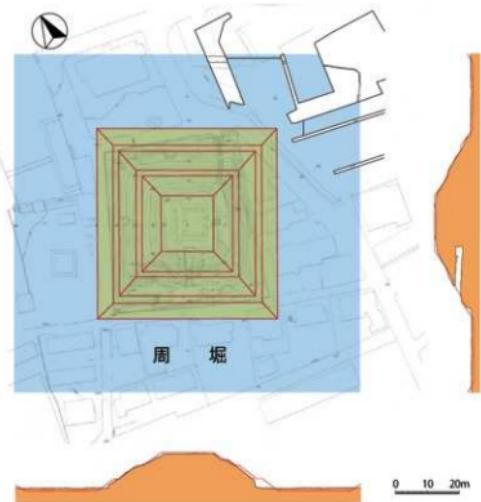
宝塔山古墳全景（北より）

宝塔山古墳は墳丘全長 66m の大型方墳で、7世紀半ばに造られたと考えられます。

墳丘は三段築成で、斜面には葺石が葺かれていたと考えられます。石室は墳丘の基壇上に造られ、南側に向けて開口しています。石室は羨道・前室・玄室からなり、それぞれの入口には門柱状の施設が設けられています。

石室は、前代の愛宕山古墳までの自然石を積み上げる石室の造り方から、きれいに加工された切石を巧みに積み上げる「截石切組積」という手法が採用されています。

さらにその上に漆喰を厚く塗って石室全体を白く平らに仕上げています。玄室の中央には輝石安山岩製の割抜式家形石棺が置かれています。愛宕山古墳の家形石棺同様非常に精巧な造りの石棺で、底面付近には装飾として格狭間が割り込まれています。

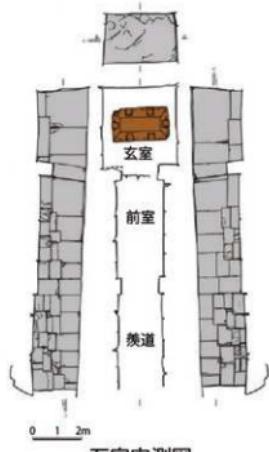


墳丘測量図



宝塔山古墳石室内の様子

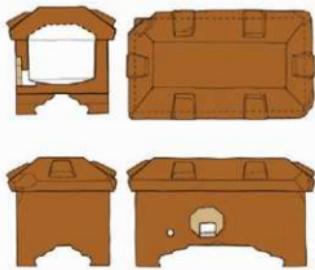
石室壁面の石材の精緻な加工と、これを積み上げる技術、
漆喰の使用などは、畿内の有力者層の古墳に用いる技術そのままと言えます。また、石棺の脚部に彫り込まれた格狭間は、
大阪府南河内郡太子町聖徳太子墓の棺台などに見られるものと同一のものと考えられ、古墳の埋葬施設に、新しい文化である仏教文化の影響が及んだ結果と言えるでしょう。



巧みに組まれた石材



石室に残る漆喰



家形石棺実測図



玄室と石棺の様子

蛇穴山古墳（国指定史跡）



蛇穴山古墳全景（南より）

【所在地】前橋市総社町総社 1587-2

【形状】方墳

【時期】7世紀後半

【規模】

墳丘全長 44m、墳丘高 5m

玄室長 3m、玄室幅 2.6m



周堤（内側）の葺石（コーナー部分）



周堤（内側）の葺石



周堤（外側）の葺石

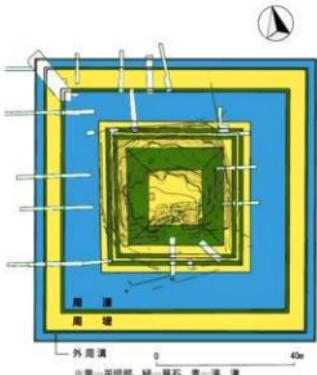


墳丘基壇の様子

蛇穴山古墳は墳丘の一辺が 44m の方墳で、7世

紀後半の築造と考えられます。墳丘は三段築成以上で、墳丘斜面には三段の葺石で飾られていたと考えられます。墳丘の周囲には周濠が巡り、その外側に葺石を施した周堤をはさみ、さらにその外側に外周溝を巡らせて、二重の堀で墳丘を取り囲んでいました。

石室は南側に向かって開き、石室前には川原石を敷いた前庭を持ちます。蛇穴山古墳はそれまでのような長い表道を持たず、わずかに切石を敷いたスペースからすぐ奥に玄室を配置します。玄室入口の天井部分には格狭間状の割り込みが施されています。



墳丘測量図

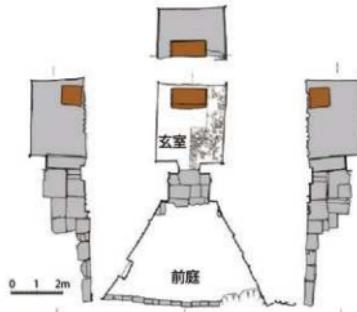


蛇穴山古墳石室

玄室は両側壁・奥壁・天井石がそれぞれ一
石の巨石で構成され、周囲を削って巧みに石
材を組み合わせるなど、高度な石材加工技術
が見られます。宝塔山古墳同様石室には漆喰
が塗られており、石室全体を平滑に白く仕上
げています。玄室の奥壁付近には牛伏砂岩製
の大きな切石が置かれており、棺を安置する
ための棺台と考えられます。



玄室に置かれた棺台



石室実測図



石室内の漆喰の様子

人間きんのうはいじ ～幻の白鳳寺院～山王廃寺(国指定史跡)



心柱を飾る根巻石 (国指定重要文化財)



石製鶴尾 (左:日枝神社、右:個人宅) (国認定重要美術品)



石製鶴尾 (左:日枝神社、右:個人宅) (国認定重要美術品)



出土した軒丸瓦



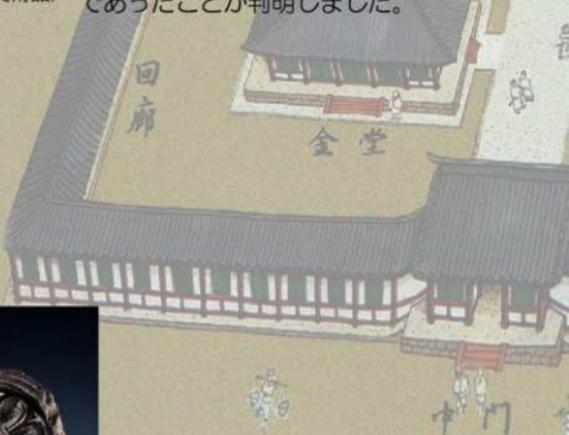
「放光寺」銘瓦



出土した軒丸瓦

総社古墳群から南西に1kmほどの場所には、古代寺院である山王廃寺があります。

山王廃寺は、大正時代に塔の心柱を受ける塔心礎が偶然発見されたことによりその存在が明らかとなり、昭和3年には国史跡に指定されました。塔心礎発見後も大棟を飾る鶴尾や、心柱の根元を飾る蓮華をかたどった根巻石などの石製美術品、塔の初層を華やかに彩る塑像群、当時の高級食器である綠釉や三彩の陶器、宝相華文を刻んだ金銅製飾り金具などが次々と発見されるなど、畿内の有力寺院にも匹敵する古代上野国を代表する寺院であったことが判明しました。



また、昭和 54 年（1979）の第六次調査において、「放光寺」とヘラで描かれた瓦や「方光」のスタンプが押捺された瓦が出土したことから、高崎市山名町の山上碑や「上野国交代実録帳」に見られる「放光寺」は山王廃寺を指し、山王廃寺の寺号が「放光寺」であったとする見解が有力となっています。

これまでの調査で大量に出土した瓦などから、寺院の創建は 7 世紀後半にさかのぼると考えられます。

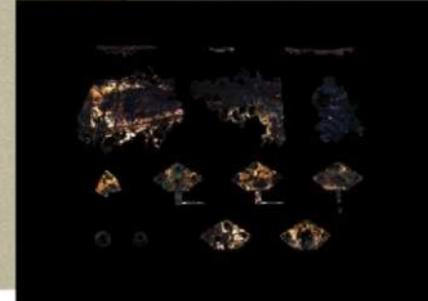
山王廃寺から出土した優美な石造物は、総社古墳群構築と共に高度な石材加工技術を駆使したもので、寺院の創建時期も考え合わせると、山王廃寺の造営に当たっては、総社古墳群を築造した有力な豪族が大きく関与していたと考えられます。



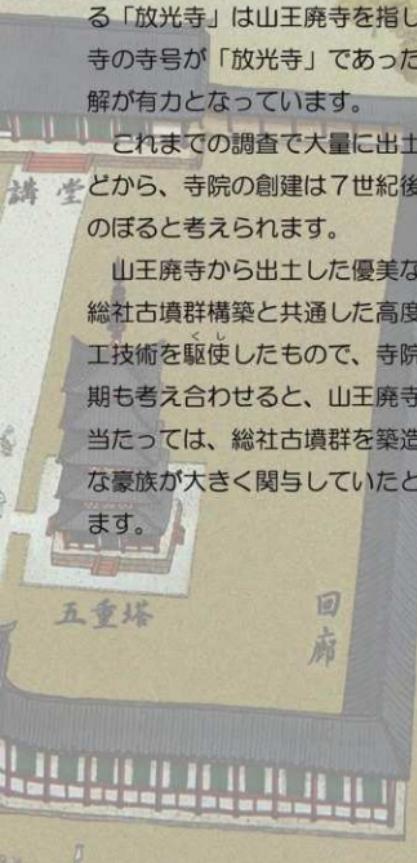
出土した塑像群（県指定重要文化財）



りょくゆうどうき いっかうしきょう （国指定重要文化財／
群馬県立歴史博物館所蔵）



こんどうせいかざれかなく
金銅製飾金具



あきまとく てんぐいわようすい 秋元氏と天狗岩用水

【秋元氏と総社】

慶長5年（1600）、関ヶ原の戦いにより徳川家康の天下経営が現実味を帯びる中、
家康は江戸城周辺の関東諸城に腹心の臣下を城主として配置しました。秋元長朝は、関ヶ原の戦功によって総社領6千石を与えられ、はじめて大名となりました。秋元氏が総社藩を治めたのは、長朝・泰朝の二代わずか3年ですが、その短い間に総社の地の基礎を築きました。



天狗岩用水（前橋市総社町）



力田遺愛碑（光巖寺）

【天狗岩用水の開削】

秋元長朝は、慶長6年（1601）に総社入封後、総社城の築城や城下町の建設など数々の事業を行いました。特に、天狗岩用水の開削は非常に大規模な工事でしたが、領民たちの協力を得て3年後には通水に成功しました。その後新田開発を行うなど領内の石高の増加に努め、六千石の藩を一万石の豊かな土地へと変えました。

【力田遺愛碑】

秋元氏の菩提寺である光巖寺の境内には、秋元氏と総社領民の強いきずなを示す碑が残されています。力田遺愛碑は、秋元氏が総社から転封して100年以上経った安永5年（1776）に建立された石碑で、領民が秋元氏の功績を碑に刻んで後世に伝えたものです。転封後もなお慕われた領主と領民の強いつながりを表しています。

東国の雄 総社古墳群

令和4年12月23日 第9刷
前橋市教育委員会事務局文化財保護課
〒371-0853 前橋市総社町三丁目11-4
電話 027-280-6511
Eメール bunkazai@city.maebashi.gunma.jp